

地域住民の水防災意識向上に向けた広報の広域展開 ～河川・防災学習拠点来館者数１００万人プロジェクト～

神郡 健太

関東地方整備局 河川部 河川計画課 (〒330-9724 埼玉県さいたま市中央区新都心2-1)

現在、国土交通省では、平成30年7月豪雨等を踏まえ、「水防災意識社会の再構築」に向けた取組の加速・充実を図ることとしている。平成29年6月にとりまとめられた緊急行動計画では、「平時からの住民等への周知・教育・訓練」に関する各種取組事項が盛り込まれている。

関東地方整備局内の広報資料館である河川・防災学習拠点全27施設を対象に、“リスク・コミュニケーション※1の普及啓発を通じて地域住民の水防災意識の向上を図る河川・防災学習拠点とすること”を目的として、「来館者数100万人」を掲げ、関係事務所等と連携し、様々な広報の取組の展開を図ることとした。

本課題では、これらの取組の実施状況、得られた成果等について報告する。

キーワード 広報 展示

1. 目的

現在、国土交通省では、平成30年7月豪雨等を踏まえ、「水防災意識社会の再構築」に向けた取組の加速・充実を図ることとしている。平成29年6月にとりまとめられた緊急行動計画では、「平時からの住民等への周知・教育・訓練」に関する各種取組事項が盛り込まれており、防災教育の促進等が進められているところである。

他方、関東地方整備局では、管内各地で待受型の広報施設が設置・運営されており、これまで河川事業への理解の促進に主眼が置かれた広報（各事業に特化した広報）が展開されてきたところである。

今後、災害時における地域住民自らの防災・減災行動につなげるための広報を強力に展開・推進していく上では、点在している広報施設を効果的・効率的に連携、活用していくことが重要である。

そこで、広報資料館である河川・防災学習拠点の全27施設を対象に、“リスク・コミュニケーションの普及啓発を通じて地域住民の水防災意識の向上を図る河川・防災学習拠点とすること”を目的として、「来館者数100万人」を掲げ、関係事務所等と連携協力し、様々な広報展開を図ることとした。

ここでは、目標に対する取組の実施状況、今後の展開等について報告する。



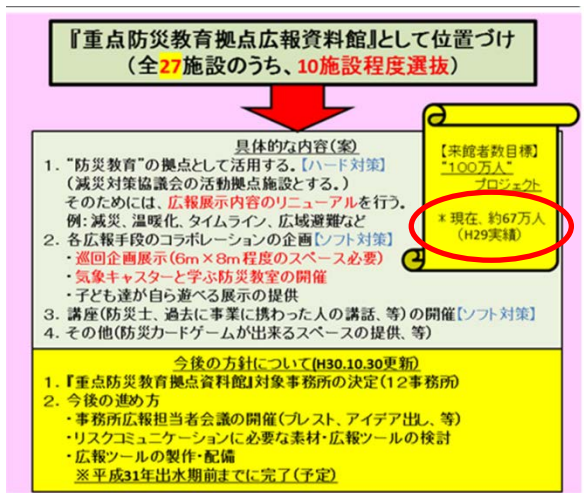
河川・防災学習拠点 龍Q館 2階展示室

2. 河川・防災学習拠点の現状及び課題について

これまでの河川・防災学習拠点では、各種事業の説明をメインに展開しており、平成27年9月の鬼怒川決壊以降、近年のニーズである「防災・減災につながる広報＝人の命をどう救うかという広報」が少ない状況にある。ソフト施策である広報活動は、受け手側（沿川住民の皆様等）がその情報を認識し、行動（避難）になってはじめて効果を発揮するものであり、情報の出し手と受け手のコミュニケーションが大変重要になる。

そこで、「沿川住民に水害リスクをどのように理解し

てもらい、いかに避難してもらうのか」をテーマのひとつとし、これまでのパネル展示中心の広報ではなく、今後はインタラクティブな広報を通じて、リスクコミュニケーションの普及啓発を図っていく必要がある。



100万人プロジェクト フロー図

昨年度は、手始めに、各河川・防災学習拠点のカルテの作成を行い、全27施設のうち、10施設程度を「重点河川・防災学習拠点」として位置づけ、重点的に新たな展示物等を配備できるよう検討を行った。

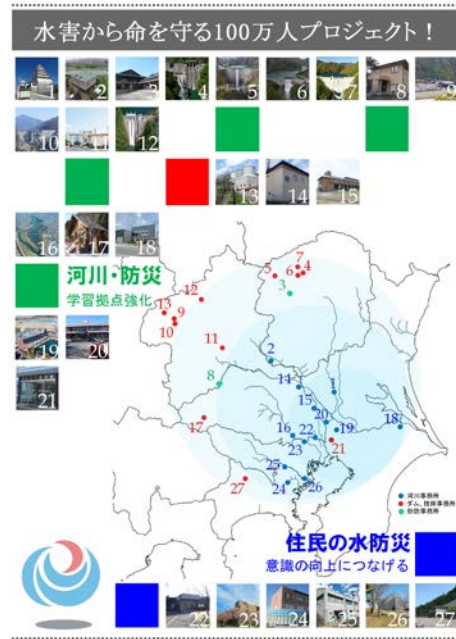
また、インタラクティブ※2な展示広報である巡回展示「雨展」を一施設ずつ順次開催し、そのアンケート結果を本プロジェクト推進のための方向性に活かすこととした。

さらに、河川・防災学習拠点のうち、代表6施設を対象に、「減災につながる広報」、「リスクコミュニケーション」、「インタラクティブ系」等の観点から、どこの資料館がどの程度不足しているかの現状分析を行った。その分析結果を受け、統一して配備していった方がよい広報ツール、個別に補充していった方がよい広報ツールを抽出した。

また、あわせて、河川・防災学習拠点の更なる活用検討として応援団募集の検討を行った。

1) 河川・防災学習拠点のポスター・チラシの作成

全27施設それぞれの特徴・魅力をどう伝えればよいか担当者会議で話し合い、それらを担当事務所に持ち帰って議論した結果、一つ一つにキャッチコピーをつけてポスター・チラシを作成することにした。「河川」「ダム」「砂防」と色分けによるラベリングを行い、写真のアングルを同じ角度に意識し、統一感をもたせるデザインとした。プロジェクト全体版と個別版を並んで掲示することにより、他の河川・防災学習拠点を認知していただくよう広報展開を図った。



ポスター・チラシ全体版



河川・防災学習拠点ポスター・チラシ例

2) インタラクティブな広報ツール

情報の受け手にとって、わかりやすく、親しみやすく、印象に残るものとなるよう、広報ツールを検討し、従前のパネル展示やパンフレット配布ではない展示内容を統一的に配備することにした。また、『水の巡回展ネットワーク(jawonet)』との連携により、「雨」をテーマにした企画展の巡回展示「雨展」を1施設ずつ順次開催。

『水の巡回展ネットワーク(jawonet)』では、専門的な内容をわかりやすく展示に表現するため、環境教育やグラフィックデザイン・映像メディアを専門とする学生と教員、展示プランナー、気象キャスター、河川管理者等がコラボレートして、アイデアを出し合うことで、今

までにない展示の開発が実現している。また、巡回のプロセスでは現場のニーズを把握するための調査を行い、新しい技術を取り入れた体験型の手法、強化段ボールを使ったコンパクトな什器の導入等、展示の質の向上や運営の効率化に役立てるといった工夫を行いながら活動を続けているものである。

「雨展」を開催した「荒川知水資料館Amoa」でのアンケート結果を見ると、新たな来館者の呼び込みが確認でき、その来館者の満足度が高いことがわかった。

また、アンケートの自由意見の中に、「手作り感があってとても面白い」「色合いもやさしくて展示も立体的でなじみやすく工夫されていて、雨の事が自然に学べた」等、『水の巡回展ネットワーク (jawanet)』の工夫が受け手側に届いていることが確認できた。

触って体感できるものが多い「雨展」の展示手法が来館者の求めているニーズと合致していたと考えられる。

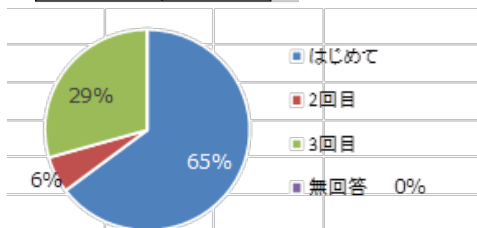
その他、防災グッズの展示も人気が高く、インタラクティブな展示のみでなく、展示方法の工夫により、興味を引くものであることがわかった。

平成30年11月より、「荒川知水資料館Amoa」、「北千葉導水路ビジターセンター」、「相俣ダム資料室」、「わたらせ川のふれあい館せせら（開催中）」で巡回展示を実施しており、展示期間中の来館者数の増加に寄与している。

<アンケート結果>

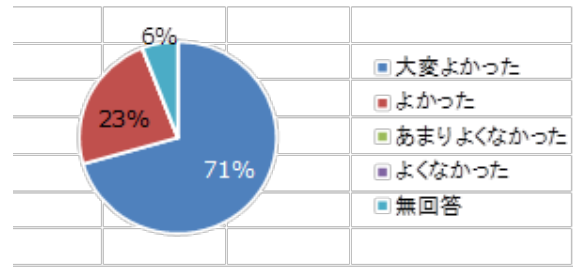
1. 荒川知水資料館をおとずれたのは何回目ですか。

選択肢	回答数
はじめて	11
2回目	1
3回目	5
無回答	0
合計	17



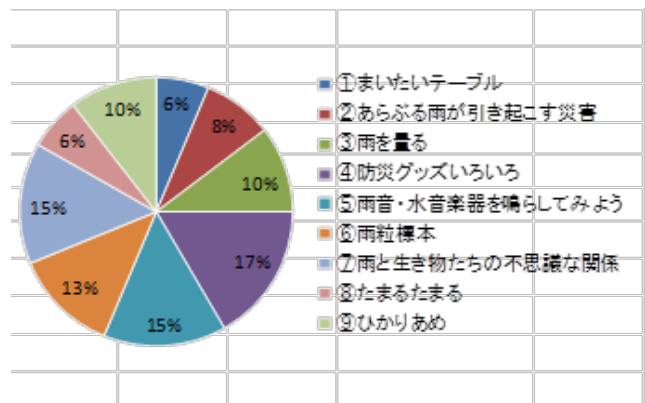
2. 企画展をご覧になった感想をお聞かせください。
(1つ選択)

選択肢	回答数
大変よかった	12
よかった	4
あまりよくなかった	0
よくなかった	0
無回答	1
合計	17



3. 展示の中でもっともよかったものはどれですか。
(複数選択)

選択肢	回答数
①まいたいテーブル	3
②あらぶる雨が引き起こす災害	4
③雨を量る	5
④防災グッズいろいろ	8
⑤雨音・水音楽器を鳴らしてみよう	7
⑥雨粒標本	6
⑦雨と生き物たちの不思議な関係	7
⑧たまるたまる	3
⑨ひかりあめ	5
合計	48



「防災グッズいろいろ」展示例 「雨音・水音」展示例

3) 応援団の募集

来館者数100万人を目指すには、河川・防災学習拠点が地域と一体となって利活用できる施設に成長していく必要があると考え、河川・防災学習拠点を“真に応援”して下さる方々(団体、個人等)を「応援団」として、大まかに3つの募集内容に分類し、募集(募集期間:平

成31年2月22日から3月25日まで)を行った。

A ガイド型応援団

河川・防災学習拠点のボランティア・ガイドや出前講座、ワークショップの講師をしていただく団体等を想定。

B 企画実施型応援団

河川・防災学習拠点において、水防災、河川環境や水質、水辺での遊び方など河川や水辺での活動について企画・実施していただくなど、川に関わる活動を行っている団体等を想定。

C 川に関わる展示物の提供・貸出型応援団

河川・防災学習拠点において、川に関する展示物(昔の写真、映像など)の無償貸出や防災関係グッズ等の無償提供をしていただく団体等を想定。

D その他 上記以外の応援。

その結果、7団体から公募提案書が提出され、河川部内で内容を確認した結果、7団体全てを応援団に認定することになった。

3. 河川・防災学習拠点の新たな展開について

『水害から命を守る100万人プロジェクト』を河川・防災学習拠点の全27施設で展開するために、今年度の本局発注業務において、統一的広報ツールとして、インタラクティブな映像展示や目で見て体験できる実験模型を行うべく準備をしているところである。

具体的には、関東地方で発生した水害や改修事業の歴史を分かりやすく説明するためのインタラクティブな映像展示の企画・制作、転倒ます型雨量計の役割や構造を分かりやすく説明するための実験模型「雨量計」の設計・製作を行う。

また、今後の広報活動に幅広く活用するため、各河川・防災拠点にふさわしいテーマのあるロゴマークを企画・制作する。あわせて、スタンプラリー等のイベントに活用できるようにスタンプシートを制作する予定である。



「雨を量る」展示例

なお、「応援団」については、今後、地域と一体となった更なる利活用を目的として、団体、個人等を募集・選定したことの“お披露目会”を行い、お披露目会予告の記者発表から100万人プロジェクトの認知度を上げつつ、今夏より、「ガイド・講師」「現地活動」「展示物の提供・貸出」など、沿川地域に向けて、新たな広報展開の取組を行っていく予定である。

4. まとめ

引き続き、関係事務所、応援団等と連携・協力し、様々な広報の様々な取組みを実施し、リスク・コミュニケーションの普及啓発を通じて地域住民の水防災意識の向上を図る河川・防災学習拠点を連携させ、『水害から命を守る100万人プロジェクト』を推進していく。

※1 対象の持つリスクに関する情報を、リスクに関係する人びとに対して可能な限り開示し、互いに共考することによって、解決に導く道筋を探る社会的技術。

※2 「双方向」に情報をやり取りすること。送り手からの一方的な情報送信ではなく、その内容に対し受け手が適宜、応答することで、受け手側のニーズを多方面に生かすことができること。